



## 十六・十七世紀の備前焼茶道具の研究

著者	下村 奈穂子
発行年	2014
その他のタイトル	Bizen ware Tea Utensils in 16th-17th centuries
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7126号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00124189">http://hdl.handle.net/2241/00124189</a>

氏名（本籍）	下村 奈穂子（ 大阪府 ）			
学 位 の 種 類	博士（ 学術 ）			
学 位 記 番 号	博甲第 7126 号			
学位授与年月	平成 26 年 7 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学 位 論 文 題 目	十六・十七世紀の備前焼茶道具の研究 Bizen ware Tea Utensils in 16th-17th centuries			
主	査	筑波大学教授	博士（文学）	八木春生
副	査	筑波大学准教授	博士（農学）	黒田乃生
副	査	筑波大学助教	博士（文学）	杉山卓史
副	査	根津美術館副館長	D.Phil.	西田宏子

## 論文の内容の要旨

### （目的）

本研究は、伝世資料、文献資料、出土資料を組み合わせ、16・17 世紀の備前焼茶道具の編年をおこない、それによって茶の湯における備前焼の位置付けや、窯自体の有り方について解明することを目的とした。

備前焼とは、岡山県備前市伊部周辺で、12 世紀から生産されている焼き締め陶器である。誕生以来、壺・甕・播鉢などの日常雑器が中心の備前焼であったが、16 世紀初期、美的価値が求められる「侘び茶」の道具として取り上げられるようになった。当時の茶の湯では、主に「唐物」と称される中国で生産された端正な姿の道具が賞玩されていた。一方、備前焼は釉薬が施されていないため、肌触りは粗く、また色彩は基本的に茶褐色であることから、極めて素朴なやきものと言える。それゆえ、備前焼茶道具を研究することによって、「侘び茶」における美的感覚の一端を明らかにすることができる。

また、備前窯では、侘び茶の黎明期である 16 世紀から、茶道具全体の生産が下火になる 17 世紀末期まで、様々な器種の茶道具が生産された。備前窯ほど、あらゆる器種を最初期から生産し、評価が高かった窯は他に存在しない。従って、備前焼を研究することによって、備前焼のみの展開が明らかにされるばかりではなく、それを指標として国内の他窯の製品に適用することも期待できるのである。

### （対象と方法）

本研究で取り上げた研究範囲は、備前焼茶道具の使用が確認できる 16 世紀初期から、茶道具の生産が下火になったと考えられる 17 世紀末期までとした。また、取り上げる器種は 16～17 世紀の茶会記に安定的に使用が認められ、名物として名物記に掲載された「水指」「茶入」「花入」「建水」の 4 種とし

た。本稿の格となるのが、この 4 種を器種ごと編年である。

まず、その基礎作業として、伝世品、茶会記、出土資料から備前焼茶道具の基礎情報を収集した。そして、その基礎情報を基に、16～17 世紀を 3 期に分けて、以下の手順で考察を加えている。

- (1) 先行研究による編年案の確認
- (2) 茶会記の分類
- (3) (2) 茶会記と (1) 伝世品の照合
- (4) 出土資料の分類
- (5) (4) 出土資料と (1) 伝世品の照合
- (6) (4) 出土資料と (2) 茶会記の照合
- (7) 小結

伝世品、文献資料、出土資料の 3 種類を以上のように組み合わせることによって、それぞれの欠陥を補い、多角的に考察を加え、備前焼茶道具の全体像を構築した。

### (結果)

編年作業をおこなった結果、備前焼茶道具は、すべての器種において、時代ごとに造形を変化させていることが明確になった。

まず天正年間(1573 - 92)には、すでに評価が高かった建水以外で、唐物写しが始まった。花入は唐物の胡銅や青磁の瓶、水指は南蛮物、茶入は唐物の肩衝茶入を写したものをそれぞれ生産していたのである。天正年間は千利休(1522～92)を中心に侘び茶で使用される道具に下剋上が起こったと考えられており、備前焼の唐物写しはそのような趣向によって誕生した新しい茶道具であったと推測される。

慶長年間(1596 - 1615)から元和年間(1615 - 24)にかけては、篋目や歪みが施された和物独自の新たな造形が誕生した。茶入は篋目が施された筒形肩衝形、水指は口縁部が内側に窄まり、口縁部や裾部に凸帯が形成され、胴部に篋目や歪みが施された矢筈口筒形、花入も同様に篋目や歪みが施された矢筈口筒形や変形瓶形である。篋目や歪みは、唐物の茶道具にも、当時の備前焼の壺・甕・播鉢などの日常雑器にもみられない装飾であるため、和物の茶道具独自の趣向であると言える。さらに、備前焼だけではなく瀬戸や信楽など他窯の茶道具にもみられ、この時期に産地を問わず流行した和物独自の新たな造形と言える。

寛永年間(1624 - 45)以降の備前窯は、いずれの器種も伊部手によって生産された。「伊部手」とは、鉄分の多い土を用い、その鉄分が焼成によって溶けて、表面が黒や茶褐色の光沢を呈するものである。水指は烏帽子箱形や手桶形・鞠形など新規の形、花入は金属器や青磁などの唐物の形を伊部手によって生産した。また、茶入は唐物茶入を忠実に模倣した形と、新規の形の二つのタイプがみられた。新規の形と唐物の忠実な模倣という二つの流れは、当時の茶の湯を牽引した小堀遠州による「遠州好み」と、東山文化の再興による「唐物回帰」という、当時の茶の湯の趣向を反映した結果であったとした。

### (考察)

以上より、16 世紀から 17 世紀にかけて、備前焼の茶道具は時代ごとに造形を変化させていたことが判明した。さらに、この造形上の変化は、茶の湯の指導者による趣向の移り変わりに起因していたとした。それぞれの時代の流行に合わせて、ほぼ全ての器種を継続して生産していた備前窯は、需要の変化に柔軟に対応し、新しい趣向に果敢に挑戦する革新的な産地であったと言える。

一方で、備前窯はこの 200 年間、基本的には須恵器から続く「焼き締め」の技術を変えることはなか

った。主力製品である壺・甕・播鉢・徳利などの日常雑器とともに、高級品であり、美的価値が求められる茶道具を無釉の焼き締めで生産し続けた。備前窯は市場の要求に柔軟に対応する革新性を持つとともに、現在に至るまで 800 年に渡って焼き締め陶の生産を続ける伝統性を持ち合わせた類まれな窯とみなすことができるのである。

また、備前焼茶道具は唐物の代替品として評価された訳ではなかったことが指摘した。16 世紀初頭の『禅鳳雑談』や「珠光古市播磨法師宛一紙」、17 世紀の『隔蓑記』などの文献資料では、備前焼茶道具の評価を判断するさい、常に唐物や金属器などの定番道具と対比し、そのうえで、備前焼の価値を認めることに重きがおかれていたからである。備前焼には金属器や青磁と比較しても、対抗できる強さや魅力が認められていた。そして備前焼は、それ自体が評価された茶の湯の道具であったと位置づけた。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

岡山県備前市伊部周辺で、12 世紀頃から生産を開始した焼き締め陶器である備前焼は、日常雑器を中心としていたが、16 世紀初期から焼成し始めた茶道具の評価は、非常に高いものであった。それにもかかわらず、備前焼についての専門的な研究は、これまでほとんどなされてこなかった。伝世品と茶会記などの文献資料により、直感的とも言ってよい、大雑把とも言える年代観に基づき、作品の時代が決定され評価がおこなわれてきたとしても過言ではない。ここ十数年の出土資料の増加にともない、それらを見捨てて考察を進めることが困難となってきた。だが出土資料を用いるにしても、茶道具の場合、それが茶道具として焼成されたことが分かる例は少なく、そのため考古学的なアプローチの重要性は認められていたものの、それをどのように用いるかが大きな課題となってきた。本研究で下村氏は、確実にそれが茶道具として用いられたことが分かる伝世品を核とし、それと文献資料、出土資料から得られた知見を組み合わせ、6 つの作業工程によって補正作業をおこなうことで、「水指」「茶入」「花入」「建水」の 4 種について現実に近いと考えられる編年を完成させた。これは画期的な方法であり、今後の備前焼以外の茶道具研究にも多大な影響を与えるものと考えられる。また 16 世紀から 17 世紀にかけて、備前焼茶道具の形式変遷は、それぞれの時代の茶の湯の指導者による趣向の移り変わりに起因しており、備前窯が需要の変化に柔軟に対応できた革新的な産地であったことを明らかにしたことも重要である。本研究は、備前焼の茶道具の実体を解明し、これまでの通説のいくつかが間違いであることを指摘したが、さらに茶道具研究の新たな方向を示した点においてもっとも評価されるものである。

平成 26 年 5 月 29 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ 学術 ）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。